

# 第69回 18年という時を隔てた 小川知子のデュエット2曲

小川知子は、昭和の時代に歌手と女優の二つの肩書きで名を成した女性ですが、その足跡を見ると、紆余曲折の歴史でもありました。

19歳になったばかりの昭和43年2月、東芝レコードから発売された『ゆうべの秘密』が大ヒット、この曲が彼女のデビュー曲とされている節があります。実は、その1年半ほど前、17歳のときにビクターから『恋旅行』という久保浩とのデュエット曲で、すでに歌手としてのデビューを飾っています。

『ゆうべの秘密』がヒットした年、レコード大賞の新人賞にノミネートされなかったのには、こうした背景がありました。

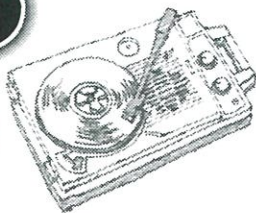
昭和41年7月に発売された『恋旅行』のシングル盤のジャケットには、副題のような感じで「アメリカアッチ」という片仮名が印刷されています。アメリカアッチとは、メキシコの音楽や楽団を表わす「マリリアッチ」をアメリカンポップスに取り入れたサウンドで、ハーブ・アルパートとティ

ファナ・ブラスの演奏が有名です。『恋旅行』発売の前月、橋幸夫がリズム歌謡の傑作『恋と涙の太陽』を

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いままで

堀井六郎  
絵・松本浦



リリース、こちらのジャケットにも「アメリカアッチ」の文字が印刷されていました。同年8月には三田明が『恋のアメリカアッチ』を発売、この年、歌謡界（特にビクター）では、リズム歌謡の切り札として、アメリカアッチを取り入れた曲の量産によるヒットをもくろんでいました。

小川がキッスをせがむ歌詞にどきまぎした当時の中学生（私です）の応援にもかかわらず『恋旅行』はヒットせず、その後、小川は東映女優として映画にシフトしますが、扇情的な映画ばかりに使われることに激怒した小川は、自ら一方的に契約を破棄して退社、レコード業界に戻ります。会社を東芝に代え、『ゆうべの秘密』のヒットにつなげました。

30代になると、歌の世界から再び映像の世界に重心を置き直し、テレビドラマ『金曜日の妻たちへ』でその存在を知らしめます。このときの共演者にいしだあゆみがいるというのも、「女優と歌手」の二兎を追う者同士というご縁の深さを感じます。

そして、世の中が「金妻ブーム」で沸く中、「金妻」ファンだった谷村新司から懇願されて実現したのが『忘れていいのゝ愛の幕切れ』でのデュエットでした。

台詞的な節回しは女優・小川知子を再確認させてくれ、小川からの提案だったといわれる、歌唱中の谷村の右手が小川の胸に滑り込む演出は、バブル到来を直前にして、団塊世代がエンターテインメントに大人のゴージャスさを求めていることを彼女が察知したことを感じさせてくれました。

18年という時を隔てた二つのデュエット曲を聴くと、そこからは進むべき道を自ら切り開いてきた一人の女性の意志と主張が作り描いた物語が浮かんできます。

